

町史

つとておきの話

197

神奈川大学非文字資料研究センター協力研究者

ルシーニュ・フレデリック



◀ 伝統の小林早乙女踊り



を「只見町の風景」コーナーの中に導入してみました。それは小林地区の梁取源左衛門さんをインタビュアした映像です。こ

学の研究者の特権的な関心事にしないで、町民の皆さまと一緒に共有して考えていきたいものです。

2010年7月17日、東京大学で行われた文化資源学会で、只見町インターネット・エコミュージアムについて発表してきました。演題は「文化財の情報発信——只見町インターネット・エコミュージアムを事例に——」というもので、神奈川大学大学院の小松大介さんとの共同報告でした。会場からは、さまざまな質問や指摘を受けました。そのなかで特に考えさせられたのは、次のようなコメントです。この只見インターネット・エコミュージアムは、民俗学の研究方法や視点に偏らずに社会学など他の研究分野の方法も導入するべきではないかという意見でした。実際にこの問題については、私たちが前から意識してきたものです。そこで、民俗の領域を広げるもう一つの取り組みとして、神奈川大学の中村政則先生が2006年2月4日に行ったライブ・ヒストリーの手法を取り入れた聞き取り調査

すこし抽象的な話になってきたので、ここで神奈川大学大学院生による調査報告書『大倉の民俗』（2008年3月）から二つの具体的な事例を挙げてみたいと思います。

これからも只見町の方々の人生を記録した文章、写真、映像、録音などの資料をもっと発信できれば、只見が近代化していく過程を面白く分かりやすく提示できるものと期待しています。しかし、この取り組みは、エコミュージアムの展示内容を充実させるというだけではありません。前回述べたように、エコミュージアムとして住民との連携は不可欠な条件ですから、さまざまな人生記録資料を提示・発信していくことは、展示内容を充実させることに留まらず、「参加型」ミュージアムとして質的に向上していくことが最も望ましい発展です。生業や年中行事など民俗学プロパターの典型的な関心事に限らず、常に開かれた視点をもって「参加型」ミュージアムの性格を維持していくべきだと思います。研究手法や博物館の方針においては、もちろんいろいろな難点があります。しかし、可能ならば、大

少年時代を大倉で過ごした昭和19年生まれの子供は、子供の頃いつも男だけでいろいろないたずらをして「新撰組の真似をして遊んでいた」と語ってくださいました。その新撰組の真似ごっこは年上の子が近藤勇の主役を演じ、年齢的に二番目の子供が土方の役をやっていたらしいのですが、戦争が終わって米国の影響により新撰組のような遊び方は暴力的だとして止められられました。つまり「戦争ごっこはやめろ」という社会的なムードがあったのです。また、Nさんは、幼い頃、子供たちのグループの親分として「アンニャ」（あにき）と呼ばれたSさんの提案で、大倉で早乙女踊りを復活しようという計画に参

加されたそうです。旧暦の正月、踊りの練習をちゃんとしたうえで、手元にあったプラスチックのビョッコト面や笠などを被り、袋を持って、5、6件の家を回ったそうです。家の人から砂糖入りの湯をご馳走になり、お菓子やイナボ（稲の穂）餅、団子を食べきれないほどたくさんもらったので、後でどこかの家で囲炉裏を囲んで餅を焼いて食べたということです。つまり、大成功だったわけですが、早乙女踊りをしたことが学校に知られてしまい、先生に「乞食のような行為はだめだ」と叱られました。それ以降、大倉で早乙女踊りをする人は一度と現れなかったという話を伺いました。

この二つの話は、「戦争ごっこはだめ」や「ものをもらうのはだめ」という当時の価値観が強く反映した出来事ですが、その時代性がリアルな形で現れている事例として、とても興味深いと思います。このような体験を民具や行事と関連してエコミュージアムのなかに導入できれば、社会の変遷がより鮮やかに見えてくるでしょう。